

ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

第1回「ゲナードで師走！」

エイムズ唯子



雑誌の年末特集で占いを読んでいたら、「あなたは、ハイリスク・ハイリターン的人生を歩みます」と書かれていました。お給料は日本の大学で働いていたころよりだいぶ減りましたから、ハイリターンのほうは目下のところハテナですが、ハイリスクは当たっています。2015年4月に日本を出たとき、アリゾナに仕事のあてはありませんでした。わが家の本棚には、おにぎりのバリエーションのレシピ本が並んでいます。教職につけなかったら、おにぎり屋をやろうと話していたからです。

食材にこだわる夫と、「1ミリオン」にいくつゼロがつくのか覚えられない妻という、商売にはどう考えても向いていない組みあわせの夫婦ですから、最初に面接をしてくれたゲナード高校で採用が決まったときは、ほっとしました。リザベーションとよばれるナバホ族の自治区で教えはじめて、3年目。文化人類学者の夫は世界史、心理学をかじったわたしは特別支援教育を担当しています。

数日前には、5月に卒業した生徒が教室を訪ねてきてくれ、「この学校でわたしにも卒業生ができた！」と、3年目という節目を実感しました。身長2mのジャマール君は、バスケットボールの花形選手。スポーツ奨学金を得て、現在はニューメキシコ州の海兵隊養成校にいます。沖縄に住んでいたこともあるわたしは、複雑な思いを抱くことなしに、米軍という組織をみる事ができません。けれども、柱となるべき産業のないネイティブ・アメリカンの自治区の高校では、卒業後に入隊することは、生徒たちにとっては憧れであり、希望です。このごろは、そのことが、受け入れられるようになってきました。



ロサンゼルスでのゲティ美術館にて「走る」

ゲナード高校は2期制なので、成績の締め切りはクリスマスが近づく22日。この時期、特別支援担当のわたしたちのところには、科目担当の先生たちからのメールがつぎつぎに入ってきます。「〇〇さんと▲▲くんのレポートが出ていません」「××くんは、このままだと落第です」…。本人をつかまえて聞くと、リュックのなかからよれよれのプリント登場です。学習障がいのあるわかれかたは個人差がありますが、記憶情報の取り出しや概念の操作に加えて、自己管理の不得手な生徒が多く、各教科の提出課題のチェックは、わたしたちの仕事の大きな比重を占めています。今年のわたしの受け持ちは1年生が11人、3年生が5人。生徒の人数も、師走の忙しさも、去年の3倍になりました。

師走のフィナーレを格別に印象深いものにしてくれたのは、学期最終日にお膳立てしたエイドリアーノ君の「朝の放送係」デビューです。彼は高機能自閉症を持つ3年生（高校は4年制）で、数学は苦手ですが、音読はピカイチ。シェイクスピアすら、声色をつかって人物を演じわけるとの持ち主です。ひとつだけ心配なのは、予定外のことに即応するのが難しいという自閉症の行動特性。本番中に飛び込みの連絡事項が入り、ひやりとしましたが、意外にもゆる

りとこなしてくれました。1年生のころは、すこしでも環境が変わると教室を抜け出して迷子になっていたのに、と振り返ると、エイドリアーノ君は、校長先生からご褒美にもったクリスマスのお菓子を手のひらに並べて、少しはにかみながら、ほほえんでいました。

エイムズ唯子:元高崎健康福祉大学准教授。専門は家族関係学。当フォーラムの元共同研究者